

「忙しくてケンカする暇ねえ！」

能力開発工学センター 小澤 秀子



これは保育園に通う、ある子供の言葉です。「保育園でケンカしてない？」と母親に聞かれた息子の答えだそうです。

「だんご作りに忙しくて、ケンカする暇ねえ！」名ゼリフとは思いませんか。これは埼玉県深谷市のすみれ保育園でのことなのですが、できれば全国すべての保育園及び学校の児童生徒に言わせたいゼリフですよ。もちろん忙しい理由は「だんご作り」以外にもさまざまあってほしいですが。

「光れ！ 泥だんご」

ここで話題の「だんご作り」。昨年来TVや新聞で紹介され、今各地の保育園などで人気のプロジェクトですのでご存知の方も多いでしょう。京都教育大学教授（心理学）の加用文男さんが指導する「泥だんご作り」です。それもただの泥だんごではない、緑色、青色、ものによっては赤色に光る美しい泥だんごなのです。名人による傑作を見れば誰しも「ほう〜」と感嘆する、とても泥とは思えない美しさです。

私が見たTV番組では、「遊び」の研究で加用さんが毎週通っている京都市内の朱い実保育園での活動が紹介されていました。2才から4才くらいのこどもたちが手に手にだんごを持って、遊びながらも放さない。うまくできない子には、保育士や「泥だんごのおっちゃん」こと加用先生が個別に指導します。完成までには8、9時間もかかります。泥を選び、だんごに丸め、乾燥のためにお休みさせ、磨いて光らせる、など6、7段階を要します。大事そうにだんごを丸める子、途中でうっかりこわしてしまっ泣き出す子、こわれただんごをあきらめ切れずにそっとビニール袋に戻す子など。番組からは、子供たちがだんごに寄せる並々ならぬ思いが伝わってきました。



一つの実験

中で感動的だったのは、加用さんが宝物のようにしている自作の「光るだんご」を子供に手渡すという実験。子供はどう反応するか。片手には自分の、もう一方に「光る」のを渡された子供は困って固ま

ってしまいます。しばらく悩んだ後でそろそろ「光る」方を返してしまいます。加用さんは同じことを数人の子供に試みましたが、反応は全員同じでした。

子供たちの心は見たところただの泥にすぎない不恰好なだんごに執着しているのです。美しく光るだんごを上げるといわれても、自分が手塩にかけて作り上げつつあるだんごを手放すことはできないのです。作る過程は、探究であり、実験であり、失敗であり、観察です。子供たちは、実はこの間の心の動きから離れられないのではないのでしょうか。

心をつかむ「場」に

このような集中をもたらす場の条件とはどのようなものなのでしょうか。要素はいくつかあるでしょうが、何とんでも「創る」場であることが人間の心をつかむといえるのではないのでしょうか。それは、脳の働きに合致しているからです。つまり人間の脳は、全体像を描いて、そのことから刻々の行動を生み出す、失敗し、悩み、光を見つける、こういう働きこそ脳本来の働きだからです。脳は、基本的に創造的な働きを快いと感じるものなのです。

6年前から探究学習を実践している富山県のグループが、今年から富山市で構案教材を用いたコンピュータ学習を復活させました。この学習が子供たちを夢中にさせるのも、それが「創る」活動だからだと思います。学校の中に、子供たちの生活の中に、もっと「創る」活動を増やしたいものです。

JADEC ニュース 57号 (2007年7月) より

★写真はフリー素材を使用しました。